



|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 北海道の地名（序論）：地理学からの接近                                                               |
| Author(s)        | 小林, 和夫                                                                            |
| Citation         | 北海道大学人文科学論集, 10, 293-313                                                          |
| Issue Date       | 1973-12-10                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/34307">https://hdl.handle.net/2115/34307</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 10_P291-313.pdf                                                                   |



## 北海道の地名（序論）

——地理学からの接近——

小 林 和 夫

### 一

ふりかえってみると、これまで北海道の地名の研究は多くの人によって行われてきた。

たとえば明治二十年、B. H. Chamberlain は「アイヌ研究からみた日本の言語・神話及び地名」を東大文学部英文紀要に発表した。明治二十二年、J. Batchelor は「アイヌ・英・和辞典」（北海道庁蔵版）をだし、アイヌ地名考をのせた。続いて明治二十四年、永田方正が「北海道蝦夷語地名解」（北海道聯合教育会）を著した。

これらの影響をうけて多数の地名考説が行われ、一時は日本の殆ど総ての地名がアイヌ語起源であるという、極端な論考まで行われるようになった。その後金田一京助がアイヌ語地名研究を再建し、知里真志保が、そして山田秀三が研究を発展させてきた。知里はすでに亡いが、山田は今も健在で研究に意欲を燃やしている。

北海道の地名の研究は、いまあげた人達の他にも多くの人達によって行われてきているのであるが、地理学の研究からの参加がみられなかったのが、一つの特徴といつてよい。

もともと「地理学各分野で地名研究は高く評価されることはすくなかった」<sup>(1)</sup>のである。そして、それなりの理由があったにせよ「長いこと地名は地理学のなかで疎略敬遠の片限に押しやられていた」<sup>(2)</sup>のである。

地名は地理学にとって、いついかなる時も無縁となることのできないものである。しかも「地名は地理学者が資料として必要とする要求を極めて正確に満してくる」<sup>(3)</sup>ものである。そして「地名の意味は、人々或はその社会組織、或は環境の自然を語ってくれるかも知れない。即ち総の事実は地理的研究に関係がある」<sup>(4)</sup>ものである。

地理学において地名研究を疎略にそして敬遠した<sup>(5)</sup>「それなりの理由」は、地理学が地名に求めたのは地名研究そのものではなく、あくまでも対象研究のための一手段として利用することにあつたからであろう。地理学にとって地名そのものは本質的な研究対象ではないかもしれない。しかしながら、地名が文化を、そして環境の自然を表現し具体化したものであるとすれば、J. B. Mitchellの言葉のごとく、「地理学の固有の対象と同等に眺めることの必要性は否定さるべきでない」<sup>(6)</sup>のである。

昭和四十三年、朝倉書店より刊行された「日本地名大事典 七 北海道」は、「刊行のことば」によれば「各地名各項目の執筆は現地在住の代表的な地理学研究者にお願い」<sup>(6)</sup>したものである。にも拘らずこの大事典の地名の解説に、不適當なものがあるのは、先に述べた地理学の地名に対する態度の当然ともいふべき結果であつたのではなからうか。

北海道において、アイヌ語地名が全道にわたって採録されたのは、幕末から明治中期にかけてである。後述することであるが、採録されたアイヌ語地名の数は、地図上ではかなり減少してしまっている現在である。アイヌ語を話す人もすくなくなり、アイヌ語地名の研究は最大のそして、最後の危機感に捕えられている。

こうしたときにこそ、アイヌ語地名研究は各学問分野からの一層の提携が必要であり、とりわけ地理学からの参加も地名との関係からいって当然であるべきだろう。

私はこうした地名研究観から、反省の意味をこめて、アイヌ語地名とその研究、そして「日本地名大事典 七 北海道」の解説にふれてみることにする。

## 二

北海道の地名の特異性は、日本語とは異なるアイヌ語地名の存在にあることはいうまでもない。かつては道内のどの土地でも「細かく調べてみると、溝のような小川にまでも、びっしりとアイヌ語の名前がついていた」という。<sup>(7)</sup>

道内にどれほどのアイヌ語地名があったかは、正確な調査が不可能であるが「東西蝦夷山川地理取調図」<sup>(8)</sup>は、アイヌ語地名が多く、当時の北海道の様子をよく物語っている。この図の作者の性格にもよるのであるか、実に丹念に、本流はもとより描かれた支流の一つ一つに名が書きこまれている。また明治版の仮製五万分の一地形図<sup>(9)</sup>にも、アイヌ語地名が非常に多い。この二組の地図は、共に現在では入手し難いものになっているが、「溝のような小川にまでも、びっしりとアイヌ語の名前がついていた」という当時の様子を今日に伝えてくれているものである。かつての道内には、現在我々が地図を拡げて想像する以上に、沢山のアイヌ語地名があった。そしてそれがこの二組の地図によって、そっくりそのまま日本人の社会へもちこまれてきたといつてよい。しかしながらこの豊富なアイヌ語地名も、減少するのは早かった。大正版の五万分の一地形図<sup>(10)</sup>になると、もう急激な減少ぶりをみせている。このことはそのまま現在の昭和版の五万分の一地形図<sup>(11)</sup>に及んでいる。かつてアイヌ語地名をもっていた山川も或は無名となり、或は日本語地名にとって変られたものもある。しかし現在の地図にみられる日本語地名の急激な増加は、北海道の明治から大正にかけて開拓の様子をうかがえば、或は当然な成行きであったのかもしれない。

現在の北海道では、いま述べたようにアイヌ語地名が減少してしまっているが、そのために北海道の地名の特異性までがうすらいできたのではないかと考える人も、或はいるかもしれない。しかし、たとえば札幌・小樽・室蘭・釧路・帯広等の道内三十余市のうち、その凡三分の二がアイヌ語地名に由来する市名であることは、やはりアイヌ語地名が北海道地名の特異性となっていることに変わりがないのではなからうか。

(i)

さて現在の北海道の地名にはどのような型があるのだろうか。それらはどのように分類できるのであろうか。昭和版五万分の一地形図でそれを検討してみることにする。

「旭川」(旭川一〇号)を例にとることにする。実は後述の地名数の経年変化の検討のためにこの図を選んだのだがこの図はアイヌ語地名の密度が中程度のところである。<sup>(12)</sup>しかも幕末、明治初期には日本人の手が比較的及ばなかったところであった。明治の中期から日本人の開拓が急速にすすめられ、或意味でのアイヌと日本人との関係の典型を示すものであると考えられる処である。

この図中には多数の地名がのっているが、分類してみると次の四つの型になる。

- |     |        |       |
|-----|--------|-------|
| (A) | オサラッペ川 | ウツベツ川 |
| (B) | 近 文    | 忠別川   |
| (C) | 旭川市    | 鷹栖村   |
| (D) | 本 町    | 中 央   |

(A)はアイヌ語地名をそのままに音に従って片仮名書きにしたものである。元来はオサラッペ、ウツベツで、〇〇川という日本風の名に相当したものである。強いてこの日本風のいい方をする<sup>(13)</sup>とオサル川、ウツ川ということになる。オサラッペの原名はオサルベツでそれが転訛してオサラッペになったという<sup>(14)</sup>。ベツはベツと全く同じもので川の意味である。

(B)はアイヌ語地名の音に漢字をあてたものである。近文はチカプミとよんでいるが、アイヌ音チカプニにこの漢字をあてたもの。忠別川はチュウベツ川とよんでいる。この川名のアイヌ音には三つの説がある。この三つのうち何れが原名であったかは結論がでないが、忠別の対象になった音はチュッベツであるという<sup>(15)</sup>。

(C)はアイヌ語地名を日本語に訳したものである。旭川市の旭川は忠別川の原名の音の一つと考えられているチュッベツを訳したものであるといわれている<sup>(16)</sup>。鷹栖村の鷹栖はチカプニを訳したものであるといわれている<sup>(17)</sup>。

(D)はその起源が全く日本的な日本語地名である。

## (ii)

北海道の地名は上記の四型にわけることができる。この四型の地名のうち、我々はどれをアイヌ語地名とよんだらよいのだろうか。

知里は「厳密に言えば、俗にアイヌ語地名と称するものには、二通りの種類がある。一つはムロラン（室蘭）、ワニシ（輪西）、ボコイ（母恋）、……などで、それらはすでに市名、町名、字名などとして正式に登録使用されている日本語の地名である。素性をしらねばもとはアイヌ語の地名であっても、今はれっきとした日本語の地名であって、もはやアイヌ語の地名でないことは、ミサキ（御崎）やゴゼンスイ（御前水）……などと、なんら変る所はない。強いて区別するならば、アイヌ語系地名とでも名づけるべきものである。……それから、もう一つの種類は、プトレナイ、ボロシレト、ポンモシリ、……などで、たとえば発音などは多少日本語化していても、日本人もそれをアイヌ語として使い、文献にもアイヌ語の地名として記録されているもの。これはもちろんアイヌ語地名と称すべきものである。……この両者を含めて旧地名と称する<sup>(18)</sup>」とアイヌ語地名を定義している。この知里の定義は、厳密すぎるといえるが、私の意見であるが、その理由を簡単に述べてみよう。

知里がアイヌ語地名としたものはこの場合、要するに片仮名書きのものをさしているのではなからうか。字名として正式に登録使用されている片仮名書きのアイヌ語地名は多い。新編室蘭市史（昭和三十年刊）には字名をあげていないが、例えば新十津川町では、町史のなかに「町内の地名は、大部分アイヌ語に起因している。また公簿上の字名もほとんどアイヌ語から転じたものである」とい<sup>(19)</sup>、四十二字名をあげているが、その中のカマヤオマナイ、ヌタップ、チャシコツ等の片仮名書きの八字名も正式に登録使用されていて、しかも日本人もそれをアイヌ語として使い、文献にもアイヌ語の地名として記録されているものである。もしこれらの八字名を、正式に登録使用されているという理由で、アイヌ語地名から除くとすれば、それは余りにも厳密すぎてしまうのではなからうか。それともこのような場合は例外として認めるというのだらうか。もし正式登録という理由ではなく、ワニシ、ボコイ等は漢字をあてられたからということであらうか。アイヌ語地名に漢字をあてた原則は、片仮名をあてたのと全く同じではなかつたらうか。たとえば十勝支庁に幸震という地名がある。現在はこれをコウシンとよんでいる。だがこの漢字を仮名としてあてた当時は、アイヌ語音に忠実にサツナイとよませていた。ただ後世の人がコウシンとよむようになっただけのことである。アイヌ語地名の表記に片仮名を使うのも、また漢字を使うのも原則は全く同じであつたと考えられる。ただ、漢字の場合は片仮名書きにくらべて無理が多く、従つて誤読されたり、漢字のよみに引きづられて、日本語化或いは転訛が著しかったというだけのことである。

例が飛躍するが、萬葉集はすべて漢字で書かれているが、だからといって萬葉集を漢文という人はいない。従つて片仮名書きでも漢字でもアイヌ語地名であることに、変りはないのではなからうか。ただここで考えられるのは、幸震のような極端な例の場合は、アイヌ語地名から余りにも離れすぎた読み方をされているので、アイヌ語地名から除くということである。しかしこれには難点がある。多様の地名の離れすぎをどのような尺度で測定するかということである。実際にはできない相談というべきものであらう。

私はこうした理由から、ムロラン（室蘭）もワニシ（輪西）もアイヌ語地名として扱うべきだと考えている。さて旭川、鷹栖の場合は日本語地名として扱うことに異存はないが、これはその由来がアイヌ語地名である。私はこれらをアイヌ語系地名として扱うことにする。しかし本稿では、便宜上これもアイヌ語地名として扱っていく。従って(A)、(B)、(C)の型の地名をアイヌ語地名として、(D)のみを日本語地名として扱うことにする。

### (iii)

北海道の地名は四つの型に分けられたが、それらの地名数が過去と現在ではどのように変化してきているかを、地図上で比較してみることにする。使用する地図は次の四種である。

|               |      |
|---------------|------|
| 東西蝦夷山川地理取調図   | 卷一一  |
| 明治版仮製五万分の一地形図 | 「旭川」 |
| 大正版五万分の一地形図   | 「旭川」 |
| 昭和版五万分の一地形図   | 「旭川」 |

「東西蝦夷山川地理取調図」は、安政六年（一八五九）、松浦武四郎によって作成されたものである。この地図は「地図上の位置は、絶対的に、相対的にも不正確であることを免れなかった」<sup>(20)</sup>が、「聞くところの蝦夷地名は一も省略せず」といわれているものである。当時の北海道を知る上で、欠かすことのできない貴重な地図である。

「明治版仮製五万分の一地形図」というのは、明治三十一年、陸地測量部によって仮製版として与えられたものである。この仮製版五万分の一地形図は、道庁の測量、製図によって作られた北海道地形図の印刷原稿を基として出発したも

ので、正式の基本測量によらないものである。

「大正版五万分の一地形図」というのは、大正五年測量のもので、正式の初測図である。使用した図は、昭和六年これに鉄道補入をしたもので、昭和二十二年印刷のものである。

「昭和版五万分の一地形図」というのは、国土地理院が、昭和三四年に空中写真によって改測し、昭和四十三年に資料修正した最新版のものである。

これら四種の図にみられる地名の数は、左記のごとくである。

|               |     |
|---------------|-----|
| 東西蝦夷山川地理取調図   | 六二  |
| 明治版仮製五万分の一地形図 | 一〇九 |
| 大正版五万分の一地形図   | 二六七 |
| 昭和版五万分の一地形図   | 三三七 |

この結果をみると、年と共に地名数の増加の様子が、はっきり現われている。

さてこの地名数の内容に立ち入って観察すると、次のようになる。

|               |              |            |            |              |
|---------------|--------------|------------|------------|--------------|
| 東西蝦夷山川地理取調図   | (A) 六一 (九八%) | (B) 〇 (〇%) | (C) 〇 (〇%) | (D) 一 (一%)   |
| 明治版仮製五万分の一地形図 | (A) 九一 (八三%) | (B) 三 (三%) | (C) 四 (四%) | (D) 一一 (一〇%) |

大正版五万分の一地形図

(A) 六(二%)

(B) 二七(一〇%)

(C) 五(二%)

(D) 二二九(八六%)

昭和版五万分の一地形図

(A) 四(一%)

(B) 二九(九%)

(C) 一〇(三%)

(D) 二九〇(八七%)

これでわかることは、「東西蝦夷山川地理取調図」と「明治版五万分の一地形図」は、(A)(B)(C)(D)の組成比率がよく類似していることである。そして「大正版五万分の一地形図」と「昭和版五万分の一地形図」が、これまた組成比率がよく類似していることである。そして、はっきりとアイヌ語地名の占める位置が逆転してしまっていることである。アイヌ語地名はほぼ半減し、総地名数に対する割合も九〇%台から一〇%台へと下降してしまっている。

「あいぬト雖モ久シク和人ニ接スル者及壯年輩ニ至テハ頗ル訛音アリ遂ニ転々相訛リテあいぬノ原語ヲ錯乱シ地名ノ意義湮滅シ今得テ解ス可カラザル者少ナカラズ故ニ地名ヲ解セント欲セバ必ズ其地ノ故老あいぬニ質サザルヲ得ズ地名ノ原語ハ唯故老あいぬノ頭上ニ在テ存スルノミ若シ故老あいぬ死スレバ地名モ亦從テ亡<sup>(22)</sup>」という永田の言葉は、アイヌ語地名に対する愛惜の声であり、研究促進の鐘声でもあった。この時から八十年が過ぎている。現在ではアイヌ語だけで会話のできる人は「厳密にいえば一人もないといつてよいかもしれない<sup>(23)</sup>」という。そして「熱心なアイヌの人のなかには、和人の書いた本を使つて一生懸命にアイヌ語を勉強しているケリスすらある<sup>(24)</sup>」という。「和音自ラ異同アルヲ以テ古今地名ヲ記シタル者簿記ニ地図ニ其ノ訛謬少シトセズ<sup>(25)</sup>」と永田のいうアイヌ語地名ではあつても、その地図からさえも減びようとしている。

これまでに、北海道のアイヌ語の地名は多くの人達によって研究されてきた。その研究タイプの一つは地名のアイヌ語を分析し、語原、語義を研究していく言語学的方法である。これは語原偏重という批判を生んだが、欠くことの出来ない研究方法である。この方法による研究成果の例として、全道に及んで、とりあげられた地名の多いという事で、現在に至るもその右に出るものがない「北海道蝦夷語地名解」がある。この本は永田が「明治十六年……草ヲ起シ……本年ニ至ルマデ年ヲ閱スルコト前後殆ンド八年纔ニ脱稿」したものである。たいへんな労作であった。北海道地名の研究をする者で、この本を手にしない者はいないであらうと思われるほどで、今では古典ともいうべき本である。知里も「この本は当時としては、やはり名著の名に恥じない立派な本であったとわたくしも思う」と述べている。またこの本は、柳田に「アイヌの地名解は永田方正氏の一著があり、又バチエラ師辞書の旧版の附録にも若干の構説があつて、今日では先づ十中の八九迄大よそ意味が明らかになつたと言つてよい」。更に「アイヌ人の地名には一つも分らぬものがない」と言わしめたものである。柳田のこの言葉は「北海道蝦夷語地名解」に対する高い評価と、アイヌ語地名研究の完了を思わせる樂觀的見解でもあつた。

しかし知里はこの本に対して「今のわたくしどもの目から見れば、ずいぶん多くの欠陥が目につく。それらの欠陥の中には地名解としてまさにチメイ的な欠陥も多いのである」と述べている。知里はこれに続けて、実に手厳しい徹底的な批判を加えた。

柳田の言葉のように、アイヌ語地名研究は終つていなかったのである。しかし、柳田のいうようなアイヌ語地名研究に対する樂觀的見解は、実は現在の一般的なものといつてよい。その典型例として、北海道土木部河川課の職員の声あげてみよう。アイヌ語地名の多くは、河川につけられたものである。河川課の職員は、その河川を扱うことが日常の業務である人達である。「北海道の主な河川について、その名の由来を一冊に纏めることは、さほど困難な仕事でもなく、辞書と図面があれば、短時日のうちに完成するものと簡単に考えてとりかかつてみたのですが、山田

秀三氏にお逢いして、その非をたしなめられ、これは大へんな仕事だと初めて気がつく有様だった<sup>(32)</sup>」のである。

この研究方法は、楽観論と共に「此地方の地名は語学であって、文化史乃至は社会心理学では無いのかも分らぬ<sup>(33)</sup>」という柳田の批判を招いた。当の柳田はこうした言語学的分析を主とした地名研究から脱して、地形や土地との関係において地名を分類整理し、多数の一致した現象からその性質を明にしようとした。先のアイヌ語地名に対する楽観論から想像できるように、柳田の研究対象には、北海道が除かれていた。

柳田の啓蒙に刺戟されて、地理学からの地名研究も僅かにみられるようになったが、やはり北海道には拡がらなかったのである。

北海道においては、柳田の批判のあと三十年を経て、知里がアイヌ語地名研究のためには「何よりも先に、地名の中に出てくる単語の外形と意味を正確につかんでいなければならない<sup>(34)</sup>」とアイヌ語学を要求しながらも、併せて「古い時代のアイヌの暮らし方や物の考え方などについても、一応知っておくことが望ましい<sup>(35)</sup>」。「地名の中には古い生活や觀念が露頭を見せているのである<sup>(36)</sup>」と、アイヌ語地名の理解のために、アイヌの文化史的背景の知識をも強く要求した。

アイヌ語地名の研究は、知里によって精緻さを増し、文化史的背景も加味された手厚いものになっていった。

このような言語学に重きをおいた研究に対比できるものとして、山田の研究がある。

知里によれば「山田さんの方法の強みは、私どものように頭で書くのではなくて、足で書く所にあり、そのご研究にはよい意味での実証精神が横溢している。……従来とかく机上の空論に流れて実証の裏づけに欠けるうらみのあった北海道及び東北地方のアイヌ語系地名の研究に、……新しいよき指針となることを信じて疑わ<sup>(37)</sup>ない」ものである。

また服部四郎によれば「先住民の言語による地名の解釈を、科学的に確立する、すなわち疑のないものとするにはどうしたらよいか。蓋し巨視的な接近法と微視的な接近法とあり、この両者を適用することによって、はじめてその

説を確立することができると思う。……山田秀三氏は『東北と北海道のアイヌ語地名考』（昭和三十二年六月、楡書房）によって、東北地方の数多くの地名がアイヌ語であることを科学的に確立された。山田氏の研究によって、それらの地方にかつてアイヌ語民族が住んでいたことは、もはや疑うことができにくくなったのである。……これは、巨視的研究と微視的研究の併用であつて、もうこうなると疑をはさむ余地はない<sup>(38)</sup>」ということである。

山田は「東北と北海道のアイヌ語地名考」に続けて多くの成果を発表している。山田の研究は簡単にいえば地形からの接近である。

アイヌ語地名の特徴の一つは「其命名スルヤ必ず土地ノ実形ニ於テシ敢テ苟モ虚名ヲ附スル者鮮シ」<sup>(39)</sup>「故ニ一度地名ヲ聞ケバ容易ニ地理ヲ知り特産ヲ探ルヲ得ベシ亦簡ニシテ便ナラズヤ」<sup>(40)</sup>ということである。従つて類似した地形のところには、類似した地名がついていくという、いわば規則性のようなものがある。実際にアイヌ語地名には、驚くべき類似と重複がみられる。これらの地名を分類整理する。亦一方では類似した地名をつけられた夫々の地形を実地踏査する。このようにして両者を対照して実証していく方法である。これはアイヌ語の知識だけではなく、現場を見る眼力を要求される、実際には労多い研究方法である。

山田の研究方法は、先に述べた柳田の地名研究方法を敷衍し、更に現場主義を徹底させたものといつてよいかもしれない。

柳田は、北海道のアイヌ語地名研究について楽観的であつたが、現在のアイヌ語地名研究の第一人者である山田は、今なお慎重論をとなえている。「北海道アイヌ語系地名の意味が昔から判つていたのだろうか。北海道の人々でさえ、自分等の地名の意味は故老が知っていると思つている場合が多い。……筆者が東北地方の地名研究の必要上から、北海道等のアイヌ語地名の分析を始めてから未だ十余にしかならないが、それでも調べて見ると疑問が出て誠に弱つてしまふ<sup>(41)</sup>」。「どの地名でも意味が分らないのが、むしろ地名の本質なのではあるまいか<sup>(42)</sup>」と。たとえば、北海

道の人にとって、馴染み深い石狩という地名は、その原名も、従ってその意味も、そしてどこにつけられたものなのか、ということもわかっていないとはいいい難い有様である。アイヌ語地名の研究に手を染めれば、山田が説くように、わからないことだらけなのである。

四

(i)

「日本地名大事典 七 北海道」の解説にふれていくことにする。この解説にはこれまでのアイヌ語地名研究の成果がもりこまれているのであるが、不適當な解説のものがある。こうしたものを数例あげてみることにする。

歌登町 (三五頁)『村名は歌登山をあらわすアイヌ語ウタヌプリ(凹地のある山)に由来するという。』

歌登町のアイヌ語地名はウタヌプリではなく、オタヌプリであった。オタは歌という漢字をあてられることが多い。またヌプリも登という漢字をあてられることが多い。

オタヌプリは現在の歌登山をさしているものではない。幌別川口から海岸沿いに三キロほど西北西にいったところにある小山に名づけられたものである。このアイヌ語の意味は、オタは砂、ヌプリは山で、砂山の意味である。

枝幸町 (三九頁)『町名枝幸は岬を意味するアイヌ語の「ユンブ」に由来するが……。』

枝幸のアイヌ語地名はエサシであった。永田は「エサシ 昆布 沖ニ岩アリテ昆布<sup>サシ</sup>生ズ故ニ号ク 枝幸

(郡村) ト称ス<sup>(60)</sup>と解説しているが、アイヌ語のサシが昆布の意味であるために、このように解説したのである。が、エサシはエサウシと同じで、岬の意味である。<sup>(61)</sup>アイヌ語でコンブというのは、日本語の昆布をさしている言葉である。

興部町 (五二頁) 『町名はアイヌ語の「オウコッペ」(川尻の合流するところ) から転化したものの。』

西興部村 (一九二頁) 『町名は「オウコトウベ」(川尻のまぢわるるところ) に西の字を冠したもの。』

この興部町、西興部村の解説は同じ執筆者のものであるが、同一アイヌ語地名に対して、僅かに異なった書き方をしている。読者の誤解をふせぐ意味から同じ表記が望ましい。一般には「オウコッペ」と書かれている。オウコッペは二つの川が、海岸近くの川尻で合流している川そのものをさしている。この解説のように合流するところをさしているのではない。

倶多楽湖 九二頁) 『クッタラはアイヌ語でイタドリの多いところの意。』

これは明治版の五万分の一地形図には、クッタラウシ沼として書かれているものと同じである。クッタラウシで解説のイタドリの多いところの意味になる。クッタラはイタドリをさしているだけである。クッタラはクツタル、クッタラウシはクツタルシが正しいという。クッタラ、クッタラウシなどよぶのは日本人なまりであるという。<sup>(43)</sup>

橋 湖 (二五五頁) 『アイヌ語で「ウバシアントウ」とよばれていたが……。』

アイヌ語地名は「ウバシアントウ」ではなく、一般にパスィュヤント(一)といわれていたもので、箸がそこ

に寄り上る沼という意味である。<sup>(44)</sup>

中島〔洞爺湖〕（一八七頁）『アイヌ語で「トウモシリ」又は「トウモシリ」（湖の島の意）である。』

この中島は、「東西蝦夷山川地理取調図」ではトウノシケノ本<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>、後方羊蹄日誌ではトウノシケモシリと書かれている。トウモシリではなく、トウノシケモシリであったようだ。意味は湖の中央の島であった。

(ii)

本事典では、一つの解しかあげておらないが、他に幾つかの解をもっているアイヌ語地名の例をあげてみる。一つのアイヌ語地名に幾つかの解があるということは、どれにも決め手となるべきものが欠けているということでもある。それらの幾つかの解のなかからどれを採用するかは、非常にむづかしく、また勇気のいることである。他の解をあげて参考にしてみよう。

厚真町（一四頁）『町名はアイヌ語で「アツマト」（湿地に葦の繁茂するところ）より出る。』

松浦武四郎

アツマ アツは獣の事にて、マは渡る義也と。又アツは木鼠の事とも云へり。<sup>(45)</sup>

永田方正

Atomap=atoma-p アトマフ 楡<sup>オシロシ</sup>アル処 「アツ」は「アットシ」ヲ綴ル樹ノ名「オマ」ハ有ル「プ」

ハ処ノ義「プ」ノ発音殆ンド無声ナリ故ニ和人ハ「アツマ」ト訛ルナリ 旧説「アツマ」ハ鼯<sup>ムササビ</sup>鼠ガ川ヲ游ギシ処ノ義又「アツ」ハ木鼠ノ義ナドアルハ非ナリ今厚真<sup>アツマ</sup>村ト称ス<sup>(46)</sup>

北海道駅名の起源

「厚真」はアイヌ語「アトマプ」すなわち「アツ・オマ・プ」(おひよう・ある・ところ)から出たものである。<sup>(47)</sup>  
知里真志保

Atomap アズマムラ(厚真村)の原名の Anna は従来 At-oma-p「オヒョウニレ・ある・所」から出たものとされているが、本当は At-toman「川向うの・やち」の訛であるらしい。<sup>(48)</sup>

更科源蔵語

語源のアズマは町勢要覧によればアツマトで「湿地に葦の繁茂するところの意」だという。……結局、厚司を織るアツ・ニ(おひよう)のある川という意味でアツ・オマ・プ、つまりおひようの木のあるところというのがその語源であるらしい。<sup>(49)</sup>

山田秀三

厚真川 アツマ 「駅名の起源」は永田氏と同解、一応は穩当な考え方である。ただしこの意味ならば At-ush(おひよう・多い)が普通の形である。あるいはアットマム At-toman←at-toman(向う側の・やち)のような地名だったかもしれない。<sup>(50)</sup>

日高町 (二二三頁)『アイヌ名「ウシャップ」(両方に出入口のあるところ)の意であるが、おそらく沙流川(さるがわ)の流れに沿って他地域との連絡口が二つあることを意味したと思う。』

更科源蔵

日高村もと右左府村と呼んだところ。何処についた地名がはっきりしないので結論がだせないが、互いに乾くものという意味にとれる。<sup>(51)</sup>

山田秀三

日高「旧名字社布、後に右左府」の市街の西側にパンケウシャブ、東側にベンケウシャブの二川が並行して流れている。一対と考えられた川である。「佐留日誌」には「ハンケウサブ、ヘンケウサブ。其饑未だ解せず」とある。アイヌの時代に、もう意味が忘れられた地名らしい。北海道行政区画便覧に、「両方へ出入口のある所」と書いてある。誰かの判読であろうが、少々無理な解に見える。萱野茂さんは、この二つの川が、「互に並んで下っている」処からこの名がついたのか、と意見を述べられた。ウ・サブ「*U-sab*」互に、下る（複数形、単数は *sab*）と読まれたもの。なるほどと思った。<sup>(52)</sup>

湧別町（二七三頁）『町名はアイヌ語の「ユーベツト」（清らかな水が湧くの意）から湧別とした。』

松浦武四郎

ユウベツ。本名トウベツ也。訳而沼の川と云也。<sup>(53)</sup>

永田方正

Yube ユベ 鮫 湧別村の原名。<sup>(54)</sup>

北海道駅名の起源

アイヌ語「ユベツ」から出たもので、語源は「ユペ・オツ」（蝶鮫・多い）から出たといわれているが、「イペオチ」即ち「イペ・オツ・イ」（魚・豊富である・所）であったと思われる。<sup>(55)</sup>

更科源蔵

アイヌ語のユペ・オツ（蝶鮫が多くいる）から出たというが、この川に蝶鮫がいたという話はきかない。イペ・オツ・イで魚の豊富な所であったと思われる。<sup>(56)</sup>

## 山田秀三

要するに、Yude-ot「蝶・多くいる」の旧説に対し、Ip-ot「食物（魚の意に使われる）・多くいる」の新説が出されたのである。資料がなくなった今日、何れが真であったかは分らない。形だけからなら I-ot-pet「それ（魚）・多くいる・川」の転だったかも知れない。<sup>(57)</sup>

## 五

冒頭に結論らしいことを書いたのでくり返しになるが、地名事典に地理学の人々が執筆することに疑問をなげる者はすくない。それだけ地名と地理学の結びつきが強いと思われるのである。しかし実態は、地理学では地名研究の成果を利用したいときだけ手をのばすという安易さである。「みんなお互ひにそれは私の領分で無いと、押付け合つて居てはよくないのである。……地理学では其研究の結果を利用するのが最も便利だろうと思つてゐるが」<sup>(58)</sup>という四十年前の柳田の言葉は、まだ生きてゐるのである。

アイヌ語地名の一つ一つが、当時のアイヌの意思に係っている。命名した者の判断がその社会の大部分の人達によつて認められ、使用されてきたものである。これ以上に自然との関係をつぶさに物語つてくれているものはない。「夫ノ海島岬灣潮汐ヲ論スル勿ク地勢ノ秀テ山岳トナリ噴テ火山トナリ経テ懸崖トナリ陥テ蹊水混々飛テ瀑漚テ湖激スル者ハ湍深キ者ハ淵水域変ジテ土地隆起シ高原トナリ平野トナリ部落此間ニ散在スル等一々之ニ名ケザル所ナシ豈唯此ノミナラン草木鳥獸魚介鉱石昆蟲等ニ至ルマデ其物アレバ必ズ其ノ地名アリ故ニ一度地名ヲ聞ケバ容易ニ地理ヲ知り特産ヲ探ルヲ得ベシ」<sup>(59)</sup>との永田の言葉によつてわかるように、アイヌ語地名は、地誌であり地図である。それゆえに地理学にとってアイヌ語地名の果す役割は非常に大きいものと考えられる。アイヌ語地名に対する地理学の敬遠の態度は、時には北海道に対する無理解につながる危険をもっていることを「日本地名大事典七 北海道」は見せてくれて

いる。地理学においても、アイヌ語地名を直接の研究対象とすべきであるとする努力は、行過であらうか。

# 注

- (1) 地名の成立ち、山口恵一郎、徳間書店、昭和四二年、P.28
- (2) (1) 同 P.29
- (3) 歴史地理、地理学講座、第五卷、J.B.シッチェル(金崎肇訳)、桐陰堂書店、昭和三二年、P.36
- (4) (3) 同 P.36
- (5) (1) 同 P.29
- (6) 日本地名大事典、第七卷、朝倉書店、昭和四三年、刊行のことは、P.3
- (7) アイヌ民俗誌(上)、第一法規出版、昭和四四年、P.79
- (8) (9) (10) (11) 2 (iii) 参照
- (12) 北海道地名分布図、筆者作成(未発表)
- (13) 旭川市史、第四卷、旭川市役所、昭和三五年、P.490
- (14) アイヌ語法概説、金田一京助、知里真志保、岩波書店、昭和一一年、P.1
- (15) (13) 同 P.487
- (16) (13) 同 P.487
- (17) (13) 同 P.490
- (18) 室蘭市旧地名考、知里真志保、山田秀三、北方文化研究報告、第一五輯、昭和三五三月、P.79~80
- (19) 新十津川町史、新十津川町役場、昭和四一年、P.283
- (20) 明治以後の北海道測量史、高倉新一郎、北方文化研究報告、第一八輯、昭和三八年四月、P.3
- (21) (20) 同 P.2
- (22) 北海道蝦夷語地名解、永田方正、北海道教育聯合会、第四版、昭和二年、緒言、P.1~2
- (23) シンボジウム、アイヌ、北海道大学図書刊行会、昭和四七年、P.180
- (24) (23) 同 P.3

- (25) (22) 同、緒言、P. 1
- (26) 明治 23 年
- (27) (22) 同、例言、P. 3 P. 3
- (28) アイヌ語入門、知里真志保、楡書房、昭和三十一年、P. 74
- (29) 定本柳田國男集、第二〇卷、筑摩書房、昭和四五年、P. 32
- (30) 総合日本民族語彙、第一卷、平凡社、昭和三〇年、序、P. 2~3
- (31) (28) 同 P. 74~75
- (32) 北海道の川の名、山田秀三、電通北海道支社、昭和四六年、P. 299
- (33) (29) 同 P. 73
- (34) (28) 同 P. 3
- (35) (28) 同 P. 3
- (36) (28) 同 P. 40
- (37) 東北と北海道のアイヌ語地名考、山田秀三、楡書房、昭和三二年、序、P. 3
- (38) 樺太アイヌ語地名小辞典、佐々木弘太郎、みやま書房、昭和四四年、はしがき、P. 2~4
- (39) (40) (22) 同、緒言、P. 1
- (41) 地名学研究、第三号、日本地名学研究会、昭和三二年九月、P. 2
- (42) (32) 同 P. 1
- (43) 幌別町のアイヌ語地名、知里真志保、山田秀三、北方文化研究報告、第一三輯、昭和三三年三月、P. 7
- (44) (43) 同 P. 23
- (45) 東蝦夷日誌、参編、松浦武四郎、(日本古典全集、日本古典集刊行会、昭和十二年、P. 617)
- (46) (22) 同 P. 208
- (47) 北海道駅名の起源、札幌鉄道管理局編、昭和三七年、P. 34
- (48) 地名アイヌ語小辞典、知里真志保、楡書房、昭和三十一年、P. 148
- (49) アイヌ語地名解、更科源藏、北書房、昭和四一年、P. 71
- (50) (32) 同 P. 225

- (51) (49) 同 P. 76  
 (52) (32) 同 P. 209  
 (53) 三航蝦夷日誌(上)、松浦武四郎、吉川弘文館、昭和四六年、P. 38  
 (54) (22) 同 P. 450  
 (55) (47) 同 P. 121  
 (56) (49) 同 P. 319  
 (57) (32) 同 P. 119  
 (58) (29) 同 P. 25  
 (59) (22) 同、緒言、P. 1  
 (60) (22) 同 P. 439  
 (61) (48) 同 P. 27